
人間そんなもんだ。

imaiwa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人間そんなもんだ。

【Nコード】

N9169E

【作者名】

imaiwa

【あらすじ】

同じ高校に通う4人の人間模様。彼等は仲がよいように見えるが、その真実はいかに？

とある高校に4人の仲のいい？生徒がいた。

？がつくのは外からみて仲が本等にいいのか認識しづらいからだ。

杉並卓三、栢山陽子、督城イナギ、蚯蚓正一。

この4人の事なんだけど……。

「よー卓三！」

朝はやく登校途中にイナギがでかい声で卓三に挨拶をした。

イナギは金髪で肩まで伸びたロング、ゲジゲジ眉毛にたらこ唇。とてもかつこいいとは言えないだろう。

「……………」

「おい、無視すんなよ、もっと明るくいきようぜ」

「もう一度いうぜ、おはよー！」

「お……はよ」

卓三君は立ち止まらず、だからと言って彼に振り向きもせず途切れる挨拶を、ぼそつとした声で言った。

「なんだよなんだよ、元気ねーな」

車が後ろから猛スピードで近付いてくる。

ここは細い道路だ。道路の右側を歩いているイサギ君。
その更に右の歩道を歩く卓三君。
突然！ 卓三君のとりとろした足鳥が俊敏なものに変わった。

「あ、あぶない！」

イサギの背中に勢いつけてドロップキックした卓三君。
車の前に踊り出るイサギ。
振り返ると、車はもう目の前だ。

「ひ~~~~~」

蹴りが足りなかった……

卓三君は、もう諦めたのか、イサギの死を半ば承諾しつつ、目を押さえてその時を待っていた。

その刹那、更に黒い影が調子よく現れたかと思うと、卓三の向かい側からイサギをすぐにひっ捕る。

間一髪イサギは車の追突から逃れる事ができた。

「は~~~~~は~~~~~」

大汗掻いて息を荒くするイサギ。

「危なかったね、イサギ君」

「僕がもう少し遅ければ君はカエルの轢死体のようになってたよ、
Boy」

「ハアハア、サンキュー正一」

「なあに気にする事はないさ、家を早めにでてよかったよ、ああ僕はなんて幸運な奴だ」

「イサギ君に恩を着せる事ができたよ」

調子よく色々くっちゃべってるこの男の名は正一。

長い黒髪を後ろに束ねる美形の少年。鼻はすつと高く、耳にはイヤリングをしている。

取りあえず、正一はおいといて……

イサギはさっきの蹴りを放った真相を卓三君に尋問しようと、駆け寄った。

目は血走ってるし、今にも掴みかかりそうだ。

「き、貴様、なんであないな事しやがるんでえ」

イサギ君は切れると関西弁が発動する。

襟首を掴んで上に引き上げると体ごと詰め寄る。

「た、助けようとしたんじゃないか……」

「どこがや、俺死にかけたやん、正一君がひっぱってくれなきゃ」

「今頃、死んでたでー」

その言葉が心にささったのか、卓三君は俯くと一言呟く。

「ごめんよ」

「でも、善意でやった事なんだ……」

「あの車は君をひき殺そうとしていた」

「そう思った俺は咄嗟に体が動いたんだ」

「ひき殺そうって……？」

「俺なんにも恨み買うような事してへんで」

卓三君が、目を細くしてイサギ君を見つめる。

「本人が気づかないうちに、相手の心を傷つける……」

「良くある話さ……」

イサギ君の首を持ち上げる手を足で払うと、卓三君はスタスタ学校の門へ入っていった。

「俺が……？」

手を震わせながら自分の行いを振り返るイサギ君。

「ハハ、こりゃ一本とられたね、イサギ君」

「な〜に、気にする事ないさ、さっきのはただの暴走車さ」

「君みたいな良い奴を殺そうだなんて考える奴はいないよ〜」

「さあ、さつき助けたお礼に何をしてもらおうかな？」

正一君はお礼をもらえることを前提に話を進める。
頭を真剣に悩ますイサギ君の深い動揺はそっちのけだ。

二人が道路の左側に寄り固まり、話を続けている時突然
大きなどぎつい声がした。とても迫力のある声だ。

「どけよ」

「やあ、これはこれは陽子ちゃんじゃないか」

「今日はご機嫌いかが？」

陽子はいわゆる不良と呼ばれる少女だ。

茶髪はもちろんだが、手にはぎらついた金色の腕輪をしていて、
平べったい靴。

薄っぺらいカバン、目に濃い紫のシャドーがどぎつい。

「ふん、最悪だよ」

「ははん、また母上とケンカでもしたのかな？だからあれほどいつも……」

正一のまたぐらに蹴りが入った。とても強烈な蹴りだ。

「お~~~~の~~~~！」

その場で金的を押さえ込みながら、足を八の字にして体を振るわせる正一。

涙目で顔を青くしていた。

「べらべらしゃべるからだよ」

「あたしや、その長い台詞聞く忍耐はもってないんでね」

「なに下向いてるんだよ、ほらいくよ、イサギ」

彼はまだ悩んでいたが、陽子が彼の右手を強引にひっぱり学校の中へと

連れ込んでいった。

正一と陽子は実は恋人同士だ。

「This is a Pen」

英語の授業が始まる中、正一は考え込んでいた。
普段明るい正一だが、悩みだすと長い。

俺は知らず知らずのうちに他人を傷つけているのか？
何がいけないんだ、どこがいけないかったんだ。

隣の席の陽子が正一のゾンビみたいな顔をみて言った。

「どうしたよ、正一」

「今日は変だよ」

「いや、俺ってさ、結構周りに恨まれるタイプ？」

「そんなことないよ、なにつまんない事で落ち込んでるのよ」

「実はさ……」

休憩時間

陽子がイサギの朝の出来事を聞いて、憤慨したのか卓三の席に早歩きで迫っていく。

「おい、卓三」

「てめー、今日イサギにつまんない事言っただってね」

「どういっつもりだい！」

「陽子ちゃん……」

多少怯えながらも心は穏やかな卓三。

彼はこれくらいの修羅場は、何度も切り抜けていて動揺は全くみせない。

「ある一例を述べただけさ」

「それが余計だっって言ってんのよ」

陽子ちゃんは逆上すると、彼の襟首を持ち上げる。
行動パターンはイサギと似ていた。

「相変わらず、荒らあらしいね」

「何でも暴力で解決できるって思ってるところが駄目だ」

「陽子ちゃんもイサギと同じさ」

「ただ君の場合、恨みはもっと買ってそうだけどね」

締め上げる襟首から手を離し卓三君を地面に置いた。

「ふん！ 恨み上等だよ、そんなものいくつもあってこそ人間なんだよ」

「敵もいないような人生なんて、楽しくもなんともないよ」

「なら、いいじゃないか…、イサギ君にも気合のこもった敵がいたって分かったんだし」

「逆に君は喜んであげないと」

「それとこれとは……」

「さて、便所に行くよ、君もついてくる？」

「まさか」

「じゃ僕は行くよ」

卓三君は陽子ちゃんを論破すると、満足げな顔を浮べ厠へスタスタ歩いていく。

とてもウンコがしたかったので、短くすんで助かったようだ。

そうか……イサギにも敵が……男はそうでなくっちゃ

なにやら独自の理論に当てはまって納得する陽子ちゃん。

卓三君がトイレから出てくると、正一君がガールハントしていた。

「美鈴ちゃん、今日僕と一緒に帰らないかい？」

「アイスクリーム奢ってあげるよ」

「いくいく！」

「じゃ決まりだね」

「ちょっと待てよ」

その二人の間に割って入る卓三君。

「卓三君どうしたのかな？」

「俺は見たんだ、お前朝車の奴に指示していたよな」

「何の話だい？」

美鈴ちゃんは話が長くなりそうなのと、険悪な雰囲気を感じ取ってそそくさと去っていった。

「ああ、美鈴ちゃん……」

うな垂れる正一。

「君の言いがかりで、彼女が逃げちゃったじゃないか」

「黙れ、この馬鹿やろう」

「俺は見ただよ」

「車が突っ込んでくる前に、手をあの車にふって何か合図をしているお前の姿をな」

「ふ、見てたのか」

突然悪ぶれた顔に変わる正一。

さっきまでの浮かれた顔が悪代官のような顔にスイッチした。

「そう、俺はイサギ君が嫌いだ」

「殺したいほどにな」

「でも、だからと言って、イサギ君を死なせるつもりはなかったよ」

「ちょっと入院してもらって、骨の2、3本折ってもらっただけだったんだよ」

「だから、足だけ踏ませるつもりで、彼を中途半端にひっぱたんだけど」

「力がはいりすぎて、結果的に助けてしまったけどね」

「ふ……」

卓三君は下を向いて、笑い出した。

「ははは」

「お前とは気があいそうだ」

「実は俺も奴の事が嫌いだったんだよ」

「あの時、イサギをわざと蹴りこんだんだ」

「暴走車に惹かれるようにね」

「でも、蹴りが足りなかった、体半分車の射程から外れていた」

「その上君が引つ張り上げるもんだから頭きたけど」

「まああの時はやりすぎたかなって思ってた事に安堵したよ」

「犯罪者にはなりたくなかったんでね」

「君も悪だね、何か彼に恨みでもあるのかい？」

「理由は……たぶんお前と同じさ」

「フフフ」

二人に友情のようなものが芽生え始めていた。

「一緒にアイツをいたぶろうぜ」

「いいよ、いたぶる方法は君が考えてくれ」

「てめーーらああああ」

「全て聞いたぞ　！！！」

突然の大きな声、壁向こうにイサギ君が隠れていたようだ。

「ふ、聞かれちゃったかい」

「そのようだね」

「ま、まさか、仲が良いって思ってたお前等に恨まれてるなんて」

卓三が下を向いたまま押し殺すように笑っている。

「理由はなんなんだ？　俺がなにしたってんだー」

「君は俺から大事なものを奪った」

「何のことだ……」

身に覚えのないことを言われ、動揺するイサギ君。

「陽子ちゃんだ！」

「俺は彼女に惚れていた、あの逞しく、男っぽい彼女にな」

「馬鹿な」

「お前が……あいつを好きだなんて」

目を丸くして卓三の唇をかみしめる顔をみつめるイサギ君。

「僕も彼女が大好きだよ」

便乗して激白する正一。

「あの野蛮さ、どこことなく影のある雰囲気、その上美形の彼女」

「とても魅力的さ」

「君さえいなければ……」

握り拳をつくり体を振るわせる正一。

「ま、そういうことさ」

「そうそう、もうばれちゃったし、ま、これから後ろに気をつけるんだね」

「いこう、卓三君」

「うん、いこう、正一君」

二人はイサギに冷たい笑顔を投げかけると、背をむけ二人並んで去っていく。

「……………」

しばらく、その場で体を震わせ立ち止まっていたイサギ君。
しかし、それも長くは続かなかった。いからせた肩を下におろして
安堵の息を深く吐いた。

「な〜んだ、俺が悪いわけじゃないじゃん」

さっぱりした口調でなにか憑き物がおちたみたいな表情を浮かべ
るイサギ君。

「あいつと別れればいいだけの話」

「それで全て解決じゃん」

「最近うざかったし、別れ話持ち出す良い頃合だな」

「別れりゃ奴等も気がすむだろうし」

「陽子探しに行くか！」

完

（後書き）

作者の独断と偏見と適当さが入り乱れています。
勢いで書いた作品なので矛盾点多々あるかと思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9169e/>

人間そんなもんだ。

2010年12月14日20時57分発行